

## 共同研究プロジェクト

# 地域と結ぶ癒しの技の研究開発

## 活動報告

馬場 雄司・濱野 清志

今年度の活動では、昨年行った様々な試みを更に推し進めることができた。今年度は、おおむね研究代表者（馬場雄司、濱野清志）及び研究協力者（永澤 哲）の3名がそれぞれのテーマのもとで活動をすすめたが、2月に、3名を含めたメンバーでのシンポジウムを開催することができた。

馬場は、自然素材の民族楽器を中心とした癒しと笑いの活動（ちんどんセラピー）を、宝塚大学看護学部の八田勘司氏の協力のもと、宇治市周辺を中心に、高齢者のデイサービス（さいわい病院、メイプルリーフなど）、地域の独居老人支援団体（たんぼぼ）の交流会、などで行った。音楽と笑いと言りの3要素を持つこの実践では、演者と利用者の壁を取り除いて自然と笑顔を創りだす仕掛けにより好評を得た。また、大分県で有機農業を営みつつ古楽器の復元・研究を行うカテリーナ古楽器研究所の松本公博氏らを2月10日～11日を招き、10日には、六地蔵の竹林の竹を利用して、本学においてフィリピンの竹楽器トガトンづくりのワークショップを行った。地域の方々を含む20名あまりの参加を得、竹を用いて自らの手で楽器を生み出すことによる五感の活性化を体験した。

濱野は、東洋的身体技法研究会と連携した活動として、濱野が講師として、気功の教室を通年で毎週火曜日の夜に本学で行い、隔週通年で金曜日の午前中、大手筋サテライトキャンパスを利用して行った。常時、地域の方々を含む10名前後の参加がみられた。また、6月23日に、湯河原にて気功を通してよりよい環境づくりとあるべき人間の姿を求めるかめへん村《健真観》を運営する気功師、中健次郎氏を招いて、気功

の講習会を開いた。中氏の気功講習会は毎年開催しているが、多くの地域の方々にも参加していただき、今年度も好評を得た。この他、関連企画として、鍼灸師の坂部昌明氏の協力のもと2月23日にお灸ヤルーシーダットン（タイ式ヨガ）などの体験型イベント「ヘルスケア見本市」を本学において実施した。お灸をはじめ地域での様々な「癒しの技」の恒常的な提供を企画していたが、実現は次年度に持ち越した。

永澤は、主として今年度は、倍音声明および野口整体を中心に活動を行った。昨年度、吉福伸逸氏を講師に招いて以降、倍音声明は本プロジェクトの一つの柱となっている。この倍音声明の理論的解明を推し進めるための音響工学的・脳科学的実験を行い、音構造の解明、特殊な脳活動の解明が行われた。今後、更に遺伝学的研究を進める予定である。また、東京芝増上寺、福岡志賀の島、札幌、京都大原など様々な地域で、倍音声明を実践し好評を得た。また、京都虚白院を会場にトランスパーソナル学会において倍音声明ワークショップを主催した。また、小平整体塾の高橋秀和氏を講師に招き、人間の生命に内蔵されている自然治癒力を発揮し生命の全うをめざす野口整体の講習会を、京都市左京区の山住神社にて7月13～14日に行った。両日とも30名ほどの参加者を集め好評であった。また、チベット人医師ニダ・チェナクツァン氏を招いてのチベット医学講習会のアレンジメントおよび通訳を行った。

2月11日には、ウイングス京都で、10日に招いたカテリーナ古楽器研究所の方々の「昔の音世界」と題するレクチャーコンサートとシンポジウム「人と音：音からみえる生活、身体、環境」

を開催し、参加者60名ほどを集め好評を得た。カテリーナ古楽器研究所所長松本公博氏と、馬場、濱野、永澤の他、京都文教短期大学学長安本義正氏を招き、音のもつ様々な力についてディスカッションを行った。レクチャーコンサートの「昔の音世界」というタイトルは、不便であった昔の暮らしの中に音に対する感性を発見するというメッセージが込められている。これをうけ、シンポジウムでは、五感を使わなくなった現代的な生活では聞こえているはずの音を遮断しているがスイッチの切り替えでいろんな音が聞こえてくる、そうした人間本来の感性を取り戻すという点について議論された。

「耳を開く」ことが人間の生命力の賦活と深く結びついているという点で、豊かな森で暮らしながら古楽器の創作・演奏活動をすることと、倍音声明は共通している（永澤）。倍音声明の研究実践とカテリーナ研究所とのコラボレーションは、今後、大きな実りが期待される。

今年度は、昨年、課題としてあげた、地域における「治療という枠組」とは異なるセルフケアの場づくりについて各プロジェクトメンバーが実践を通じて進展をはかることができた。来年度は、これらの実践を更に進めつつ、「癒しの技－代替医療」「地域」をキーワードにしたまとめのシンポジウムを企画している。